

## 郊外居住高齢者の都心への外出行動に関する研究

*A Study on Activities of Suburban Elderly People in Center Urban Area\**

村岡 洋成\*\*・浅野 光行\*\*\*

*By Hiroshige MURAOKA\*\*, Mitsuyuki ASANO\*\*\**

### 1. はじめに

我が国では世界に例をみない速さで高齢化が進行しており、2025年には4人に1人が65歳以上の高齢者という超高齢社会を迎えようとしている。高齢者の行動はより活発になり、余暇活動や就労など広域的な範囲にわたる行動が多くなると考えられる。豊かな高齢社会に向けて、このような広域的な活動に伴う移動がより重要になってきている。本研究では、高齢者の広域的な活動の内容と必要性を確認し、高齢者に対応した都市環境と交通環境のあり方に対する知見を得ることを目的としている。

高齢者の生活や交通に関して多くの既往研究があり高齢者の行動特性とそれに影響をあたえる要因、交通行動の実態などが示されている。高齢者のアクティビティに関しては、例えば村木ら<sup>1)</sup>がアクティビティと生活充実度との相互関係を示している。都市計画サイドの視点からは、木村ら<sup>2)</sup>が都市施設の配置と高齢者のアクティビティの関係を示している。しかし、大都市圏における広域移動やライフスタイルの変化について言及しているものはほとんどない。本研究は高齢者のアクティビティに関する研究に属するものと考えられ、広域的な外出行動とライフスタイル志向に着目している点が特徴といえる。

本研究では、まず東京都市圏の郊外に居住する高齢者について、都心地域への外出行動に着目し、高齢者の広域的な外出行動の実態と意識をアンケ

ート調査により明らかにする。また、アクティビティに影響を与える要因として、高齢期の外出に関するライフスタイル志向に着目し、都心への外出行動との関係について考察する。ここでは、都心地域とは、商業施設・業務施設等の集積している地域とし、「山手線の内側及びその沿線地域」を示すことにする。

### 2. 調査および対象地域の概要

本研究の調査対象地域は、多摩ニュータウン諏訪・永山地区とした。東京都心部の西約30kmに位置し、都心部へは鉄道を利用して40分から50分程度の距離にある。都心への外出が日常的に可能な距離であり、実際に従業者・通学者のうち約3割が区部に通っていること、また都心通勤者のベッタウン的存在であったことなどを考慮し、対象地域として選定した。高齢人口比率は約10%と決して高くはないが、ニュータウン開発当初に入居した世代の加齢にともない高齢化が急速に進行している地域である。アンケート調査の実施概要と調査項目は表1に示すとおりである。

表1 アンケート調査の概要

対象	アンケート実施日	配布数	有効回収率
地域居住者	配布日 :H11年12月4日 回収期限 :H11年12月4日	1,000	287[28.7%]
老人クラブ	H11年12月4日および12月9日	46	34[73.9%]
対象者の属性			
分類		人数	
高齢期(65歳以上)		97	[30.2%]
高齢準備期(50歳~64歳)		126	[39.3%]
49歳以下		98	[30.5%]
調査項目			
(1)個人属性			
(2)都心に対する意識			
(3)都心への外出行動			
(4)ライフスタイル志向			

\* キーワード：交通弱者対策

\*\* 学生員 早稲田大学大学院理工学研究科建設工学専攻

\*\*\* フェロー会員 工博 早稲田大学理工学部土木工学科教授  
(東京都新宿区大久保3-4-1 51-15-07)

TEL03-5286-3408 FAX03-5272-9723

### 3. 都心への外出行動の実態と意識

#### (1) 都心への外出頻度

高齢期（ここでは65歳以上）について、目的別の都心への外出頻度をみている（図1）。「買物」や「仕事・用事」では、半数以上が年に数回以上都心へ外出している。「買物」では17.5%の高齢者が月に数回以上と、頻繁に外出している。

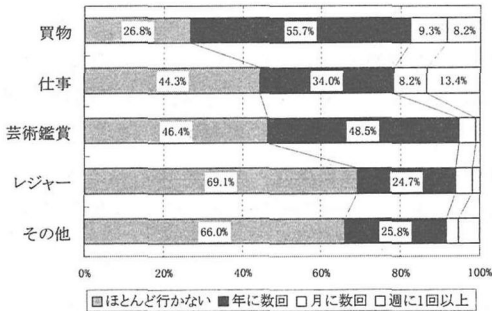


図1 都心への目的別外出頻度

#### (2) 個人属性と都心への外出頻度

これまでの高齢者交通の研究によると、免許保有の有無・職業の有無は高齢者の外出頻度に影響を与えるとされている。高齢期の対象者について、免許の有無別に都心への外出頻度（図2）をみている。免許の保有者は特に「仕事・用事」「買物」で外出頻度が高くなっているが、「芸術鑑賞」では、免許保有による差は小さい。ほとんど全ての人が公共交通機関を利用している都心への外出行動についても免許の保有者が外出頻度が高くなる傾向があるが、自由目的では頻繁に外出する割合は免許の有無に関わらず同じ程度であることが分かる。なお、職業の有無と外出頻度の関係においても同様の傾向が見られた。

#### (3) 都心への外出意識

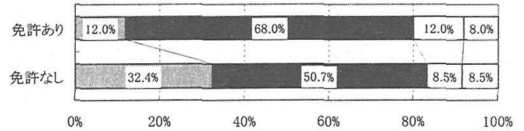
まず、「どのような目的で都心へ行きたいか」という質問に対する回答において、高齢者の特徴としては、「仕事」の必要性が低く「医療・公共サービス」の必要性が高いことが挙げられる。これは、都心部の高度な医療サービスを受ける必要性を示していると思われる（自由回答で同様の意見が2件）。また、都心に近いことの利点や魅力

をたずねた設問では、全体で買物・通勤・イベントなど利便性の評価が高い。高齢期ではこのような利便性の評価が他の年代と比べて低く、「学習機会・人とふれあう・家族の近くに住める」など、人とのつながりに関係する項目で評価が高い。年齢に応じた都心の評価をしていることが分かる。

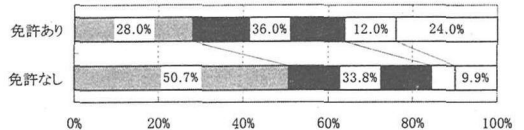
#### (4) 都心外出時の問題点

都心への外出時の問題点（図3）は、混雑や料金などすべての年齢層で同様の傾向があるが、高齢期では、他の年代に比べて都心地域内のベンチ・トイレ等の施設や歩行空間、駅施設に不便を感じている。また、公共交通の問題点としては、高齢者は所要時間について他の年代よりも不便を感じていないが、料金が問題という回答が多くなった。シルバーパス等の高齢者に対する料金補助は、都心への外出を促進させる効果があると思われる。

#### 買物



#### 仕事・用事



#### 芸術鑑賞

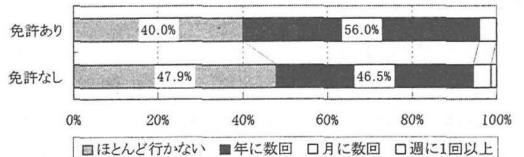


図2 免許保有と都心への外出頻度の関係

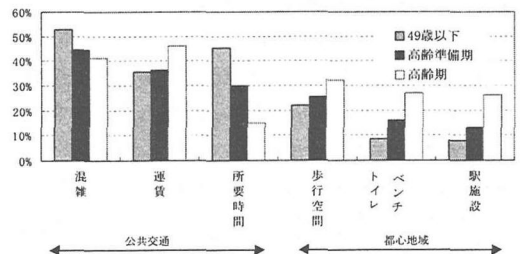


図3 都心へ外出するときの問題点

#### 4. 高齢期のライフスタイル志向

##### (1) ライフスタイル志向

次に、外出に対する意識と実際の外出行動の関連性を調べる。外出の面からライフスタイルを大きく2つに分けて、次のように仮定し、高齢期のライフスタイルとしてどちらが好ましいかをたずねた。ここでは、非常に積極的に外出するライフスタイルを“外出型”と設定している。

外出型	地域内だけではなく、都心や周辺の都市へ積極的に外出する生活
地域型	地域を中心に、必要なときだけ都心や周辺の都市に外出する生活

まず、全体をみると「外出型」「どちらかという」と外出型をあわせると、24.0%の人が積極的な外出志向を持っている。これに対して、72.3%が地域型の生活を望んでいる。外出型の割合は、高齢期が25.8%ともっとも多く、積極的な外出を志向する高齢者が存在することを示している。

高齢期の対象者について、個人属性とライフスタイル志向の関係(図5)をみると、免許の有無、職業の有無ともにライフスタイル志向に違いが見られ、免許があり、職業がある高齢者の外出志向が高い。

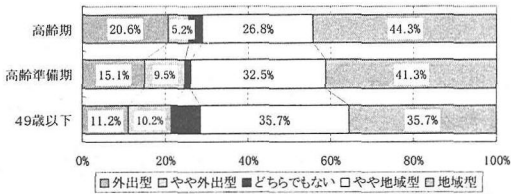


図4 高齢期のライフスタイル志向(年齢別)

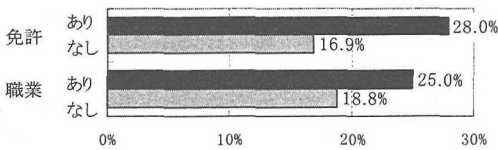


図5 外出型の割合(個人属性別)

##### (2) ライフスタイル志向と外出頻度

高齢期の対象者に限定して、ライフスタイル志向別に、都心への外出頻度をまとめたものが図6である。2つのライフスタイル志向での頻度の差が明らかであり、ライフスタイル志向が都心への

外出の頻度と関係があることが分かる。自由行動(買物・飲食、芸術鑑賞)と必要性・義務性の高い行動(仕事・用事)ともに、ライフスタイル志向によって大きな差がある。

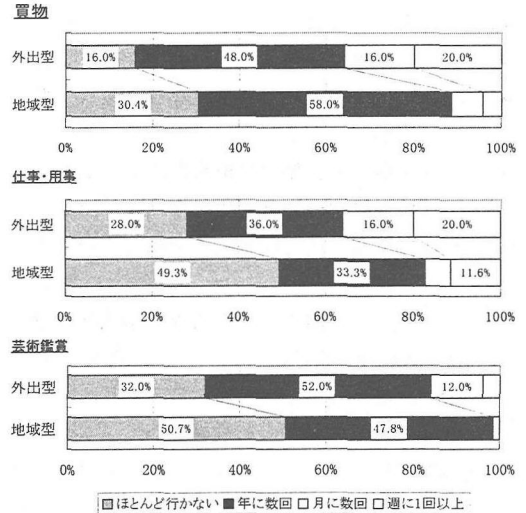


図6 ライフスタイル志向と都心外出頻度

##### (3) ライフスタイル志向に影響を与える要因

ライフスタイル志向に影響を与える要因としては、(1)でみた個人属性の他に、利便性などの地域環境の満足度が考えられる。そこで、ライフスタイル志向ごとに地域環境の満足度の平均値を算出した結果\*を表2に示す。周辺地域へのアクセス以外は、地域への満足度は高い。ライフスタイル志向による満足度の差は小さく、どの評価項目でも有意な差は認められなかった。都心や周辺都市への外出意向が高いことは、地域に対する不満から生じるものではないことがわかる。

表2 地域環境の満足度

居住地評価項目	外出型	地域型
地域生活の利便性	0.64	0.75
地域の雰囲気	0.40	0.49
地域インフラ整備	1.00	0.86
住環境・自然環境	1.04	1.01
都心へのアクセス性	0.12	0.00
周辺都市へのアクセス性	-0.04	-0.06
生活全般	0.44	0.42

## 5. まとめ

本研究では、郊外から都心への外出に着目して高齢者の広域的な外出について考察を行った。まず、都心への外出行動の実態と意識について、次のようにまとめられる。

- 都心へ頻繁に外出する高齢者が存在する。
- 高齢者は他の年齢層とは異なった観点で都心の評価をしている。
- 免許・職業の有無が外出頻度に影響を与えるが、自由目的の行動では積極的な外出をする割合は免許・職業の有無に関わらず同程度である。
- 郊外居住の高齢者が都心に求める機能・魅力は、選択性、イベントやサービスの質の高さ、街の活気や情報といったものであり、地域で求められているものとは異なる。

都心部の魅力は集積によるメリットといえ、高齢者にとっても魅力的であり、地域で充足することは困難である。生活圏との対応について、都心と地域の関係をまとめると図7のように示すことができる。地域では日常生活の利便性の向上が必要である。一方で、都心へのアクセス性を高めることで、都心地域の商業・文化などの既存施設を有効利用し、高齢者の余暇活動の場として活かすことができる。都心への外出はほとんどが公共交通利用であり、移動や都心の環境を高齢者に対応したものに改善することによって、自動車を利用できない高齢者のアクティビティを向上させることに有効であろう。

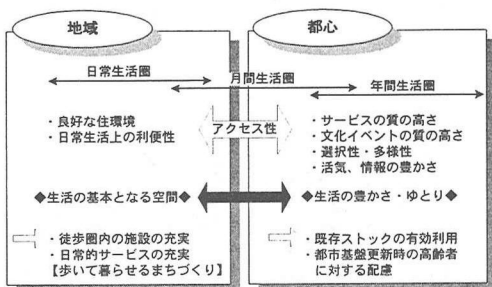


図7 都心と地域の関係

次に、外出に対する意識としてのライフスタイル志向について、次のようなことが分かった。

- 高齢者の約1/4が「外出型」のライフスタイルを志向し、積極的な外出志向をしている。
- 外出に関するライフスタイル志向は実際の外出行動に影響を与える。
- 外出志向と地域の満足度との関連性はあまりみられず、地域の不満から外出志向が高くなっているのではない。

年齢によるライフスタイル志向の大きな差がないことから、今後も積極的な外出志向を持つ高齢者が存在すると考えられる。体力の低下などにより、需要が潜在化することも考えられ、広域的な移動環境の改善が必要である。階段や段差の解消などバリアフリーの推進に加えて、都心におけるベンチやトイレの十分な整備、より快適な歩行空間の整備など高齢者の必要とする目目細かな対策が必要である。交通費用も高齢者にとって負担となっており、料金補助制度も対策の一つとして考えられる。また、今回の対象とした東京都市圏では、公共交通の混雑は高齢者にとって大きな障壁となるため、本格的な高齢社会を目前に控えた現在、混雑解消の必要性はさらに大きな意味をもつといえる。

## 6. おわりに

本研究では、高齢者の広域的な移動の必要性と実態を示し、対象地域における都心と地域について、生活圏との対応の視点から、都市環境・交通環境のあり方を示した。今回は扱うことができなかった旅行などの都心以外への広域的な外出行動の把握や、広域的な外出行動と移動抵抗・交通困難の関連性などについては今後の課題としたい。

※：「充分満足」=2、「やや満足」=1、「ふつう」=0、「やや不満」=-1、「おおいに不満」=-2と重み付けを行い、有意水準5%で、平均値の差の検定を行った。

### 参考文献

- 1) 村木康行、家田仁：高齢者の生活活力とモビリティ環境および移動アクティビティの相互関係、土木学会第51回年次学術講演会講演概要集Ⅳ、pp.154-155 1996
- 2) 木村一裕、清水浩志郎、伊藤誉志広：高齢者のアクティビティに影響を与える要因に関する研究 第34回都市計画学会学術論文集、pp.955-960 1999